



リーディング・テスト 作成の心得

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

今回は、リーディング・テストのつくり方を扱う。リーディングのテストは、中学校でも定期試験などでよく作成されるが、いくつかの問題点も散見される。以下に、リーディング・テストを作成する際に必要な心得をまとめてみる。

1. テキスト (文章) はどうするか

定期試験におけるリーディング・テストでは、教科書の「本文」を使う。このごく当たり前のことをもう一度見直してみようと思う。教科書の「本文」ということは、授業で生徒の誰もが読んでいるということである。多くの場合、たとえ英語は覚えていなかったとしても、内容は覚えている。このようなテキストを用いてのリーディング・テストは、本当に生徒の読解力を見ているとはいいがたい。

だとすると、リーディングのテストで読解力を見るというごく当たり前のことを定期試験で実践するには、すでに習ったテキストを用いることは避けなければならないだろう。では、どのようなテキストを用いるかとなれば、習っていないテキストということになる。具体的な方法としては、教科書のテキストとパラレルなテキストを作成する方法が考えられる。「パラレルなテキスト」とは、文章の構成などは同じだが、単語が異なっているテキストである。

この方法は、学年が上がって、テキストの内容がトピックを深く掘り下げたようなものになってくると、あまり応用が利かなくなる。「パラレルなテキスト」の作成が困難な場合は、他社の教科書の同様のポイントを含んだ箇所を参考にしてもいいだろう。ただしこの場合は、未習の単語や文法事項がないかどうかチェックし、未習のものは注をつけたり

書き換えたりなどする必要がある。

定期試験では、実は意外なほど内容理解問題の出題が少ないのだが、これは既習のテキストをテストに使用しているためであろう。テキストがあり、それにいくつもの問題がぶら下がっているために、一見すると読解問題に見えるかもしれないが、よく見るとテキストの内容理解を問う問題が含まれていないことも少なくない。これはいわゆる「総合問題」である。注意をしなければならない。

2. 「会話」は読むものか

中学校の定期試験や高校入試問題を見ると、「会話文」の読解問題が出題されていることがよくある。当初は、リーディングの問題なのになぜ「会話文」を読ませるのか私にはよく理解できなかったが、いろいろ調べてみると、教科書の「本文」には「会話文」があり、これをもとにテストをつくるので「会話文の読解問題」となってしまうということがわかった(高校入試問題はこの延長で出題されていると思われる)。現行の教科書の「本文」を見ると、実にたくさんの会話文があることに気づく。しかしながら、現実の生活の中で「会話文」を読むことは多くないだろう。確かにインタビュー記事や劇の台本などでは「会話文」を読むことになる。ただ、これらを読む可能性は、他のタイプの文章を読む可能性に比べればはるかに少ないだろうし、教科書に載っているような「会話文」は、インタビュー記事や劇の台本などとはまるで異なるものである。

リーディング・テストの作成にあたっては、生徒が実生活で読みそうなテキスト・タイプから文章を選ぶべきであろう。そうすることで、オーセンティックなタスクが作りやすくなる。「会話文」と

いうテキスト・タイプを読むことが現実の生活では起こりにくいとする、それに伴う現実的なタスクを考えることは難しい。

3. どのような「質」の理解を問うか

読解問題をつくるにあたり、どのような「質」の理解を問うているかに関して、あまり意識が向いていないことが多いのではないかと。とにかく文章を持ってきて、そこから問えることを場当たりの次々作問していく、という具合である。この場合、どのような「質」の理解を問うかは、その文章によって大きく左右されてしまう。

読解問題が問うている理解の「質」としては、いくつかのものが考えられる。よく用いられるメタファーとしては、*read the line / read between the lines / read beyond the lines* というような分類がある。具体例を見てみよう。以下は、*NEW CROWN 3* (平成18年度版) Lesson 7 'A Vulture and a Child' から取った文章である。

Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. But it also has great problems.

In 1993 the people of Sudan suffered from war and hunger. Few people knew about this. Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to see the problems of Sudan.

One day Carter saw a child. She was lying on the ground. He knew why the child was there. She was so hungry that she could not move. Suddenly a vulture appeared. He took this photo.

The photo appeared in newspapers all over the world. It made him famous. He won a Pulitzer Prize for it.

このような文章の読解問題で、たとえば *Where is Sudan?* というような問題を出したとしよう。この問題には、冒頭の *Sudan is a large country in northeast Africa.* という1文を読めば解答できてしまう。このような問題を *read the line* タイプの

問題と呼ぶ。

これに対して、*What made Carter famous?* という質問に対しては、*The photo appeared in newspapers all over the world. It made him famous.* という部分を読んで、*it* が *the photo* を指していることを理解して解答しなければならない。このような問題を *read between the lines* タイプの問題という。通常、*read between the lines* というのは「行間を読む」ということで、書かれていない内容を推測することをいうが、この分類では、複数の文にわたる理解を問うような問題のことをいう。

また、*Why did Carter take this photo?* というような問題を出したとすると、これに対する答えは直接的に書かれているわけではないので、文章全体を読んだ上で推測して解答する必要がある。このようなタイプの問題を *read beyond the lines* タイプの問題という。

自分のつくった読解問題がどのような「質」の理解を問うているかを知るには、上で見たように、その問題に解答するために文章のどの部分を読み、それをどのように理解できるとその問題に正解するのかを自分でモニターしてみるといい。読解問題では往々にして、表面的な読みを問う問題 (*read the line* タイプ) が多くなる。まず、そのリーディング・テストの目的を確認し、その目的に合ったタイプの出題を心がけるべきである。

4. 問題同士の依存がないか

中学生を対象としたリーディング・テストでは、文章が比較的短い。それと同時に、その短い文章に複数の問題が「ぶら下がっている」ことが多い。そのために、1つの問題が別の問題の答えを示してしまっていることがある。これを「問題同士が依存している」というが、こうした設問づくりは避けなければならない。たとえば *Did Yumi go to Okinawa?* という問題があり、その後で *What did Yumi buy in Okinawa?* という問題があると、後者の問題から、ユミが沖縄に行ったことは自明であろう。このような依存を避けて、1つの文章に1つの問題しかぶら下げないというやり方も検討してみてもよいだろう。